

調整班研究

調整班研究A01「原典」

調整班代表 池田 知久

(1) 本研究課題の諸目的を達成するために、本年度は2回の研究集会を開催した。第1回は5月に東京で開催。7名の計画研究者と公募研究者が中国・イスラム・日本・タミル・ヨーロッパなどの各文明(分野)における原典の状況、原典の研究状況の概略について報告した(池田知久・井谷鋼造・五味文彦・関口順・高橋孝信・堀池信夫・松川節)。第2回は11月に京都で開催。5名の計画および公募研究者が中国・イスラム・日本などの各文明(分野)における原典の状況、原典の調査・研究結果などについて専門的かつ詳細な報告を行い(池田知久・久保一之・五味文彦・堀池信夫・間野英二)、それに基づいて出席者全員が討論を行った。なお、原典班の研究成果の一端は、各研究者の手で報告書にまとめて印刷され、ニューズレター『古典学の再構築』に掲載されている。

(2) 他の古典諸学との協力・連携を求めて、総括班との協力の下、原典班は本年度1回の公開シンポジウムを開催した。平成12年3月の2日間、東京で「文明と古典」を開催。内外から裘錫圭教授(中国、北京大学)などの著名な学者を招聘して基調講演・パネルディスカッション・全体討議を行い、原典班からは「原典班研究報告」を始めとして5名が全体・イスラム・日本・タミル・インドなどの各文明(分野)における原典の研究について専門的な報告を行い(池田知久・井谷鋼造・尾上陽介・高橋孝信・松田和信)、それに基づいて出席者の間で若干の討論を行った。

(3) 原典班の各計画研究・公募研究を推進する一助として、画像処理・文献印刷の可能な高性能のネットワークプリンター、および文献複写用の解像力の高いレンズ・三脚などの写真器材を購入した。これらは東京大学文学部に設置して研究者の共同利用に供した。

(4) 原典班の研究を推進するために、東京大学文学部に設置してあるパソコン数台を利用して、中国関係の新出資料を始めとする諸原典のデータベースを作成した。その入力には、基本的に研究代表者・協力者の無償奉仕であるが、一部分を学生アルバイト(東京大学大学院生)・非常勤の嘱託アルバイト(早稲田大学大学院卒)に委嘱

した。また、原典班に関わる諸般の事務を処理するために、非常勤の嘱託アルバイト(早稲田大学大学院卒)を委嘱した。

調整班研究A02「本文批評と解釈」

調整班代表 関根 清三

1. 調整班研究「本文批評と解釈」の研究目的は、中国・インド・イスラエルの諸古典学が結集して、本文批評と解釈の、新しい理論と実際を提示することである。
2. 従来の古典学では、その方法論に潜む価値観(例えば近代西欧特有の自然観や人間観など)が古典本文の客観的な読みを阻害する傾向が少なからずあり、また近年急速に発達してきたコンピューターの総合的な利用法について十分な検討がなされて来なかった。
3. 本調整班研究、この二点の不備を補い、諸古典本文固有の論理を客観的に記述する視座を創出すること、またコンピューターを駆使した古典解釈学の標準を確立し、これを普及させることを目指し、99年6月に京都で、同年7月と2000年2月には東京で、三度にわたる共同研究会を催し、またその成果をニューズレターに公にした。またニューズレター第5号は、本調整班が編集にあたり、企画執筆に当たった。

調整班研究A03「情報処理」

調整班代表 徳永 宗雄

1. 京都大学文学部徳永研究室に設置したサーバに、特定領域研究「古典学再構築」総括班のホームページを開設し、本特定領域研究の広報活動を支援した。また、総括班のメーリングリストを開設し、情報交換の場を整備した。(広報支援活動)
2. 世界に先駆けて、古典インド叙事詩『マハーバータ』のPoona批判校訂版(全20巻)のデジタル化に成功した。

これにより、同叙事詩は、Web browserで閲覧できるだけでなく、ノートブックPCでも容易に運搬でき、研究の効率が飛躍的に上昇することが期待される。(同叙事詩のポータブル化)

3. 古典インド文学最高傑作である『シャクンタラー姫物語』のデジタルテキストを完成した。さらに、そのテキストを本特定領域研究サーバ上に設けた ftp site (ftp://tiger.bun.kyoto-u.ac.jp/pub/mtokunag) に載せ、国内外の研究者が自由にダウンロードできるようにした。(サンسكريット文献の電子テキスト化)

4. 古典学において世界で初めての試みとなる、『マハーバーラタ』に関するオンラインによる国際共同研究を企画し、その実施にむけ、共同研究で使用する基礎資料を整えた。また、文献の入力方式に詳しい研究分担者の協力のもとに、XMLないしはSGML言語を用いた基礎文献資料のデータベース化の可能性を探り、研究成果をネット上で公開するGIF、PDF、HTML等の方式についても検討を行った。同時に、同共同研究のコアメンバーの人選を行い、メーリングリストを開設した。現在、XML言語の実用化に向けさらに検討を続けている。(データベース作成に関する入力方式の検討)

コンピュータを用いて古典文献研究を効率的に行うには、扱いやすい文字処理体系が不可欠である。しかし、現状では、各分野によって異なる文字処理体系が独自に選択あるいは開発され、互換性のないままに運用されており、このことが、古典学諸領域の相互連携を阻害する大きく原因となっている。この問題を解決するには、研究者間での文献データ共有を可能ならしめる普遍的なデジタルコード体系の確立が不可欠である。今年度はこの体系の可能性について検討を行い、その実現に向けて各種の予備的調査を行った。データベース技術の分野では、複数の文字コードを扱うことを可能にするプログラムが登場しつつあるが、これら多様なプログラムを検証することによって、今年度、異なる古典文献を包括する普遍的デジタル化技術の実現にむけて糸口を掴むことができた。

また、近年、コンピュータで扱える各種の漢字処理系が提供されたことにより、異なる漢字処理体系を橋渡しをする変換処理システムの必要性が高まっている。この事実を踏まえ、今年度得られた知見をもとにして、次年度は以下の実験を行う予定である。

1. モデルとなる数分野を選定し、サンプルデータを用いて、データの公開・変換等に関するデモンストレーションを行う。
2. 既存の複数の文字コード体系を可換的ならしめる、

中間的文字コード体系を試作し、相互変換ツール・プログラムと共に公開する。

3. オンラインによる古典学共同研究等を支援するために、インターネットを用いた研究者間による文献データの交換と共有を容易にする情報サービス技術の開発に取り組み、その技術の試運用を行う。

なお、上記作業と平行して、文字処理の基礎資料として複数のサンسكريット文献の電子テキストを作成した。

調整班研究A04「古典の世界像」

調整班代表 内山 勝利

平成11年度は、公募研究による参加者10名および計画研究の分担者3名が新たに加わり、当調整班の編成は計20名となった。本年度の第1回の会合を6月26日に京都において開催し、今後の研究活動の方針などについて意見交換を行った。席上、調整班研究の目的として、単なる比較研究のレベルにとどまることなく、真に有効かつ有意義な総合化・普遍化への方途を確立することが改めて相互確認された。そして、そのための当面の方針として、第一に、調整班員各自が目下取り組んでいる研究を披瀝しあい、ディスカッションを重ねることで、各分野間の相互理解と相互協力による研究進展への寄与の可能性を探ることで意見の一致を見た。

それを踏まえて、本年度内に3回の研究会を予定するものとし、これまでに2回開催され(7月16日、12月19日)、3回目は3月23日開催が決定している。毎回、分野を異にする4人の発表者を順次選定し、その発表とそれにもとづく討論を行っている。

また、前年度から継続中の取り組みとして、課題レポートの持ち寄りが行われている。これまで、各古典領域ごとの「学の理念とその内実」および「異文化との関係・交渉・2課題についての取りまとめ」がなされた。特に前者については、そのレポートをもとに、本年度第1回シンポジウムにおいて、「調整班講演/東西古典世界における学の理念と内実」を行った(「古典学の再構築」第5号に要旨所掲)。これについても、今後さらに継続していく予定である。また、班員各自の研究成果については、それぞれの項を参照されたい。

調整班研究B01「伝承と受容(世界)」

調整班代表 中務 哲郎

調整班には多彩な分野の方々に参加しているので、まず分野間・研究者相互の理解を深めるため、三名の方に報告と問題提起をしていただき、それを元に討論を行った。秋山学氏「西洋古典の伝承史における予型論的視点の影響について」は、旧約聖書の中に新約聖書のキリストや後の教会に対する約束預言を見いだす聖書学的な予型論を、広く相異なる文化伝統の間に応用して、ウェルギリウス『牧歌 4』(生まれくる幼子とキリストの誕生)およびホメロス『オデュッセイア』(マストに縛り付けられる英雄と十字架上のキリスト)の例を解釈史・写本伝承の中で考察した。西村賀子氏「ヨーロッパにおける古典の伝承」は、ギリシア・ローマの古典がいかにして保存され伝承されてきたかを、物理的要因・社会的要因・宗教的要因の三つの側面から説き明かし、紙料の開発・字体の進化・印刷術と大量生産、これらが古いテキストの保存と伝承のためには利害の両面があったことを指摘した。早島理氏「インド大乘仏教瑜伽行学派における聖典(アーガマ)継承の研究」は、大蔵経テキストデータベースの作成状況と利用法を説明し、問題点の指摘(資金、著作権、外字、海外の同様のプロジェクトとの協力・連携)に続いて、世俗諦・勝義諦、三性説、盡所有性、如所有性を手がかりに瑜伽行学派における聖典(アーガマ)継承について所論を展開した。発表後の討論は基本的な質問から忌憚ない意見まで活発に取り交わされて極めて有益であった。

調整班研究B02「伝承と受容(日本)」

調整班代表 木田 章義

調整班研究「伝承と受容(日本)」は、各シンポジウムの機会を利用して、意見の調整を行ってきた。また、調整班だけの集会としては、夏休みに開催し、そこで特定領域全体の中でのB02班の特徴と、できる可能性のある範囲について、徹底的に討議した。

これまでの討議から、各人が自分の研究に鋭意工夫を凝らし、成果を上げてゆくこと以外に、この班が特定領域の中でどのような位置にあるのか、どのようなことを行う可能性があるのかについてまとめた。この班では、

文学も語学も歴史もあり、全体としての統一をとることは大変難しいことであることは、共通の理解となっているが、班としてまとまった成果を作る方向に向けて努力することも了承された。討議の結果、「中世における外国文化の受容」を中心として成果をまとめることは可能であること、また「古代における文の受容」という方向も可能であろうということが分かった。

来年度、研究成果が出始める頃には、各人の研究成果は成果として発表してもらおうと同時に、班全体との調整を行うことに決した。

調整班研究B03「近代社会と古典」

調整班代表 中川 久定

本調整班では、研究分担者それぞれの専門とする分野において、近現代社会への古典の継承がどのように行われているかを次のような形で検討してきた。

ヨーロッパ中世 アリストテレス哲学が、中世ヨーロッパで、権威として受け入れられたのはいかなる理由によるかを検討中である。(中川純男)

中世イラン 英雄叙事詩『シャーナーメ』の写本調査を実施し、英国図書館より挿絵の含まれた良質写本14点のマイクロフィルムをとり寄せ、その読解を進めている。(羽田 正)

中世ドイツ ルターによる聖書のドイツ語訳を中心に研究を進めている。ルター自身の書き込みによる校訂作業のうち、引用の出典確認と参照された諸版(古印刷本)の確定作業を進めた。同時に、当分野の研究状況の把握にも努めている。(松浦 純)

ルネサンス期フランス ルネサンス期の大学学芸学部におけるアリストテレスの『オルガノン』講義を当面の対象として、スコラ学からの変容の過程を明らかにした。(月村辰雄)

18世紀フランス 『百科全書』本巻(1751-1765年)の項目を手掛かりにして、ギリシャ・ラテンの古典に対するヨーロッパ知識人の意識の変容を検討した。古典(中・高等学校の生徒に対して教えるに値する、と判断されたギリシャ・ラテン作家の著作)は、17世紀以来、文体の卓越性によって権威をもつテキストとして扱われてきた。だが18世紀半ばになると知識人は、古典テキストを、テキストそのものとして重視する立場(古典文献学者)と、自らの問題意識のために利用する立場(批評家)とに分化してくる。その過程を明らかにした。(中川久定)